



冬の間、お天気のいい日は、毎日のようにマラソンごっこをしてきました。準備運動の後、リクエストした曲が終わるまで、ペースランニングをします。初めは疲れていた子どもたち、今ではこの表情で、軽やかに走ります。

「できる」までさせるって？

「みんな違ってみんないい」「成長の早さは人それぞれ」「人には、得意・不得意がある」私たち大人からすると、分かっていること、当たり前なこと、その通りですよ。

ですが、ついつい我が子と、周りの子を比べてしまうこと、ありませんか。

周囲の子どもができていのに、我が子はできていないという場面、焦りますよね。自分はどう接しているでしょうか。

- 1 「何で、こんなこともできないの。」と言い、できるまで徹底してやらせる。
- 2 できていた人のことを話題にして、できないことを本人に自覚させる。
- 3 やらせてみて、コツを教えながら少しずつ練習する。
- 4 さりげなく見守り、できたときに一緒に大いに喜ぶ。
- 5 個性だと捉えて、いつかできると信じて待つ。
- 6 気にせず放置する。

どれに近いでしょうか。場面によって対応は変わるかも知れません。

ところで、このような対応をした後、我が子ができるようになったとします。その時の声かけも1～6で大きく変わるのではないのでしょうか。

「できて当たり前よ。」「ほらね、やればできるじゃないの。」「やったね。できた。」「すごい、すごい。できたね。」「やっぱりね」等々。

実は子どもたちにとって、これらの言動は「できた」という事実よりも、うんと強く心に響いているのです。

今、学校では、学んで力を高めるために、非認知能力（心）が、なくてはならないものだとされています。

例えば、自分を高めようとする力、自分と向き合う力、他の人とつながる力などのことです。これらの力の基礎は幼児期の今、育まれます。

そして、これらの力が自分にあるのかわいのかを、周囲の人の評価（言動）から子どもは敏感に感じ取ります。周囲の言動が、子どもの心にすり込まれていくのです。

先程の1～6に戻って考えると、例えば、いつも1のような対応を受けている子どもは、「自分はできない子なんだ。」と自信や意欲がしぼんでしまうでしょう。

6のような対応を受け続けると、「自分はいつでもいい子なんだ。」と自分を大切にしなくなってしまうかも知れません。

そう考えると、その時点で「できる」か「できないか」ということよりも、「できた」とき、「できなかった」ときの周囲の評価（言動）が、子どもの成長のためにはすごく重要だということが分かります。

最も大切にしたいのは、子ども自身が自ら考えて、挑戦して、振り返って、喜んだり、悔しがったりする心の動きに基づいた「できた」「できなかった」です。それを支える言動を心掛けたいものです。

【1・2月のきらり】



【年少組のマラソングッコ】

避難の仕方を知り、訓練がしっかりできました。消防車にも乗せてもらいました。

エクシード体操、マラソングッコ、縄跳び、固定施設、器械運動など、毎日のいろいろな運動遊びで、みんなで楽しみながら体力アップをめざしています。



【ボール投げ遊び】



【雲梯遊び】

年長組は、牛乳パックを使って、根気強く自分のマフラーを編みました。マフラーとポンポンの色は自分で決めました。

組毎に違う材料を使って、思い思いの鬼に変身しました。紙の豆や豆入れも工夫して作りました。「自分の中の〇〇鬼をやっつけます」と決めて、豆まきをしました。



【手編みのマフラー】



【避難訓練の後消防車見学】



【節分の豆まき】



【中学生職場体験活動】

蒲生中職場体験学習。手を貸さず見守る優しさを学んだそうです。

園開放に7名のお友達が参加しました。自由遊びでは、年少組の園児が、遊びをリードしていました。



【園開放「ドレミファらんど」】



【柁城小4年生との交流活動】

柁城小の4年生が、来園して、一緒に遊びました。園児の様子を知り、3月に園児が楽しめる企画をして学校に招待してくれるそうです。

年長組は、柁城小学校1年生の授業見学をしました。国語や算数、一人ずつの机やタブレット、漢字などに興味津々でした。



【柁城小1年生の授業を見学】